

花のふるさとメキシコを訪ねて

小 泉 力

私達の生活の中でメキシコ原産の植物から多くの恵を受けている。例えばトウモロコシ、サツマイモ、カボチャ等の食物、花ではダリア、コスモス、ジニアほかのキク科植物、ポインセチア、サボテン等の多くを数える。メキシコの旅は花の原産地が見られる絶好の機会であった。

今回は2010年9月22日から29日まで8日間の旅である。参加者は日本から鈴木団長以下17名、アメリカから石原三郎氏（33年卒）と現地メキシコから加藤直之氏（35年卒）が加わり19名となった。旅行社は日本旅行で添乗員は鈴木伸章氏が同行した。

9月22日（水）

空路メキシコへ

成田空港をアロエメヒコ航空（AM）にて一路メキシコシティに向けて離陸、所要時間約13時間の長旅ではあったが無事到着した。

無事通関、メキシコ在留35年の経歴を持つ現地ガイド川原さんが出迎えてくれた。

9月23日（木）

カセドラル大聖堂

午前はメキシコ市内の大学都市であるメキシコ国立自治大学（UNAM）の植物園見学に向かう。早朝、市中心街にあるカセドラル大聖堂の広場に寄る。今日



ダリア・コッキネア

は大規模なデモがある予定だと市内に警官が出動していて物々しい。広場は大聖堂や政府機関の郵政省、元国会議事堂の大蔵省、メキシコ銀行などに囲まれている。9時から始まるミサの鐘が鳴る中で、メキシコの解説を聞く。

大学都市植物園

入り口ゲートを入ると早速、ダリア・コッキネアの野生種が周辺の草叢に咲いていた。色は赤色からオレンジまでであった。チグリジアが美しく咲き、印象深い。足元には小型の白いビデンスとマリーゴールドの小型種が雑草状に咲く。珍しいピンクのベゴニアが目された。サボテンや多肉植物のコレクションが園内の大面積を占める。多肉植物は竜舌蘭、柱サボテン、ウチワサボテン、ユッカなどが植えられ、年数を経て巨大かつ長大になり、メキシコらしいエキゾチックな景観を呈していた。

園内は花木、宿根草等、多数の植物が庭園風に植え込まれており、それぞれに学名や原産地が記入されたラベルが付いていた。Native Mexico と書かれたものが見られた。

午後から XOCHIMILCO 観光 水郷地帯の花市場へ

船に乗っての水郷めぐりである。バンドの船が近寄り、1曲歌ってもらって何がしのお金を貰う陽気なメキシカン流である。このあたりは花の栽培や小売市場があって、船に乗って花屋に寄り、鉢花や観葉植物を買い求める客で商売になるらしい。

花屋に上陸する。ビニールハウスの中には、カラフルな球根ベゴニア、グロキシニア、ペチュニア、シクラメン、ユリ、コリウス、スプレーギク、アザレア、ブルーファンフラワー、ニューギニア・インパチエンス、ハボタン、ゼラニウム、マリーゴールド、パンジー、四季咲きベゴニア、木立ベゴニア、マツバボタン、ワスレナグサ、キンセンカ、ガザニア、ケイトウ、トウガラシ、大鉢に植えたバラ、巨大輪ダリア、ブーゲンビレア、ハイビスカス、観葉植物、コニファー、盆栽



日本メキシコ学院にて 前列中央加藤直之理事長

など多種多様な花卉が並べられていた。

9月下旬に春と夏秋の草花が同居しているのは、高冷地で涼しい気候のためであろうか。

日本メキシコ学院

加藤直之君の案内で彼が理事長を務めている日本メキシコ学院を視察した。この学校は幼稚園から小・中・高校まである。初めは日系の子弟のための教育機関であったが、現在はメキシコのエリート校としてメキシコ要人の子弟も通学しているとのことである。日系人や日系企業の寄付と日本政府の田中角栄首相当時の援助もあって設立され、33年を経過してメキシコの一流校になっているという。ここでは既に忘れられた古き良き日本の伝統がまだ生きていた。その教育方針や日系人の努力を想い、感激した。

日墨会館視察と夕食会、加藤君の茶庭

この協会の日本庭園の一隅に茶室がある。これは日本人移住90周年を記念して作られた裏千家寄贈のもので加藤君が作った茶庭もある。彼は園芸学部茶道部で吉江修司先生の奥様からお茶を習ったことから聞いたが、遠くメキシコの地で花開いた。

日墨会館では2世の松本氏(Ing. Jose Ernesto MATSUMOTO)らの歓迎を受けた。花葉会一行のために海苔巻寿司、天ぷら、赤飯などの日本料理を用意していただいた。日本人会がメキシコの発展に果たした役割の一端をお聞きし感激。

9月24日(金)

ダリア原種群生地

市内から2時間ほど走った場所にあるダリア原種群

生地に向かう。ここは川原ガイドさんが見つけた場所である。車からピンクのコスモスの群生地が見える。ここでのコスモスは畑の雑草で耕作を放棄するとたちまちコスモス畑になってしまうらしい。この風景はコスモスだけでなく、キク科の全面真黄色になった畑やトウモロコシ畑の雑草としても多く見られた。

目的地は現地住民にあらかじめ川原さんが話をつけておいた場所である。ここも耕作放棄地の様相で、コスモスとキク科植物の大小が優先していたが、すぐ脇の林の植叢は多様な植物が見られた。

サルビア・メキシカーナ、ノコギリソウ、フジバカマに似たもの、マリーゴールド似の草丈の長いもの、ビデンスのウインターコスモス、真っ赤やオレンジ色のダリア・コッキネアがウチワサボテンの間に咲いていたが盛りは過ぎていた。黄色のユリ科カロコタスの可憐な花が目をついた。赤のペンステムン、青色のツユクサは日本のものと同じだが厚い葉であった。雑草畑と化していたがわい性のビデンスの白、マリーゴールドの黄に混じって咲くピンクのコスモスの風景はワイルドフラワーとして見ても美しかった。全面黄色に覆われた畑が多く、高さ2mのヒマワリに似たタイプであった。

ウチワサボテン栽培農場

次の視察地は広大なウチワサボテンの生産農場であった。果実や若い葉を食用にしている。昨夜のディナーで葉のステーキを食べた。ここではウインターコスモスが雑草化していた。

テオティワカン遺跡

サボテン農場の隣接地にメキシコを代表するテオティワカン遺跡があり、短い時間だが見学した。壮大なメキシコ文明がこの地に栄えていた時代を思う。ここでは地面に張りついているようにして咲いている極くわい性のサンビタリアが目立った。日本ではこのような極くわい性にはならないのは気候のせいだろうか。

またこのような草姿は他の遺跡でも同様に見られていた。

国立人類学博物館

夕方になってこの博物館に到着した。巨大な石像や怪奇な彫刻に異文化の一端に触れる。優れたメキシコの文化の歴史をみて感動。夕闇迫る頃にホテルに向かい、夕食後に加藤君と別れた。

9月25日(土)

メキシコシティからプエブラを經由してオアハカへ

日の出前にホテルを発ち、オアハカに向かう。平坦な畑地を過ぎて山岳地帯に入るとメキシコの松の樹林帯に入る。峠を越えてまた平地が開けると遠く山並みが見えて、右手には富士山そっくりのポボカテペトル山が雪をかぶって美しい山容を見せてきた。このあたりの畑は主にトモロコシ栽培だが、耕作放棄地は大抵キク科の大形の黄色い花の雑草である。

チョルーラ遺跡見学

9時30分頃、プエブラのチョルーラ遺跡に着いた。平原の中に小山があり、その上に明るいオレンジエローのレメディオス聖母教会が建っている。快晴の青空に映えて美しい。この教会はスペインが建てたものだが、実はこの山のように見える場所はスペインに滅ぼされた遺跡だというのが、到底信じられない大きさの山である。汗をかきながら頂上を目指す。途中で楽器を鳴らしバラの花びらを撒きながら登って来る行列に出逢う。結婚式らしい。陽気な国民性である。

頂上の眺望は360度で吹く風も爽やかで皆見とれてしまう。

ここでの植物探索では、ダリア・コッキネアの良い株があったが、そのほかはこれまでとあまり変わらない種類であった。珍しい植物ではマメ科でエリスリナに似た花型で黄緑色の目立つ低木があった。帰国後調べたらアフリカ産のクロタラリア・アガティフローラであった。

山岳地帯を越えてオアハカに向かう。途中、どこまでも続く山肌に柱サボテンが林立していた。

サボテンの自生地

途中でバスを止めて(AGUAという地点)サボテン自生地に踏み入る。ここのサボテンはイメージと違い、砂漠ではなく乾燥地だが、ジニアなどの一年草や灌木の中に生育していた。ここでもジニアの原種を見たが、園芸種のようなカラフルさはなく、くすんだ赤、オレンジ、黄色がいかにも原種らしい色合いで、葉や草丈は小さい。

オアハカに夕方到着

宿泊地のカミノ・レアル・オアハカホテルは市街地にあり、元修道院の瀟洒な建物である。中庭の植物の植え込みはセンス良く、二階の回廊を囲むブーゲンビレアの花が美しかった。ホテルの広間では、結婚披



柱サボテン自生地



ジニアの野生種。サンビタリアも混生

露宴があつて大音響で紳士淑女が夜半まで踊り狂っているのは壮観で、さすがラテンアメリカの国だと思った。ここは観光地で夜の町は賑やかで露店も並び、珍しいメキシコ土産選びに時を過ごした。

9月26日(日)

ランの植物園

朝から小雨の降る中、ランの植物園を目指す。町から遠く離れた山中に住み、メキシコのランを収集している学者がいるという。入口にはランの絵の案内板があるが、ラン園という華やかな雰囲気ではない。入って見ると野生植物を収集し、溪谷に沿った森林の中に植えたり木にぶらさげたりしている。収集した植物はラン科以外にも観葉性のペゴニア類、アナナス類のコレクション等多数あり、自然の生態園である。ランは開花期でなかったため一部が咲いていたが地味なものが多かった。宿根性のヒマワリと言われる花が咲いて

いて珍しかった。

ラン園を辞して、メキシコ植物探索の最後の秘境を目指して雨の降る中を奥地に向かった。待望のダリア・ピンナタの原種を道路脇の崖の上に発見。皆興奮してシャッターを切ったが、雨降りの中で余りクリアな写真が撮れなかったのが残念。ペンステムンなど花の種類は多かったが雨が激しくなり早々に引き揚げた。

帰途、途中で原住民の集落を訪れた。傾斜の深い山中に数軒が見える。ガイドの川原さんの顔で訪問を受け入れてもらったが、カメラを向けたいけないとの注意があった。空き缶などにダリアの園芸種を植えていたが、見慣れている野生種は雑草扱いで余り関心がないらしい。傾斜地にアガパンサス等の花が植えてある。バスの便があるので、町に出荷しているとのことだった。

巨大杉を見る

町に戻り、サンタマリア・デ・トゥーレの巨大杉（メキシコヌマスギ）を見学、樹齢2000年超、根元幹周58mで、ギネスで世界一の巨木と認定されているという。



サンタマリア・デ・トゥーレの巨大杉

午後、サボテカ族聖地ミトラ遺跡

ここでもサンビタリアなどキク科の植物が目立ったが、小型のチランジアの着生やそのまま園芸化できそうな黄色のフリーシアがあった。

9月27日（月）～28（火）

オアハカからメキシコシティに戻り、帰国の途に着く。

モンテアルバン遺跡

朝早く出発して最初にモンテアルバン遺跡を見学。オアハカ地方で有名な遺跡である。今朝も雨の中での見学となった。壮大な石積みの遺跡の中に人間の様々な彫刻があり、征服者が行なった解剖などの気味の悪い彫刻もあるが興味深い。博物館もあり、遺跡ファンには必見の場所の一つである。植物はこれまでの遺跡と共通なサンビタリアなどキク科が目立っていた。

帰国へ

見学後、メキシコ市に同じ道に戻り、空港に向かう。お世話になった川原ガイドさんと別れて機乗、夜半23:50メキシコ空港を立ち、ティファナ空港で給油、翌28日2:55発にて成田に向かう。

9月29日（水）

早朝6:45無事に成田空港に到着した。

旅行を終えて

今回のメキシコの旅では幾つかの大きな収穫があった。一つは中米というこれまで足を踏み入れなかった植物遺伝資源の宝庫を訪れることができた。帰国後改めてメキシコの植物を見ると、いかに多くの農作物や花卉がここから世界に伝播したかを知った。この有用植物群は現地住民に見出されて、その文化と共に発展してきた。アステカやマヤの文化が人類の食文化や花卉園芸にも果たした恩恵は計り知れないものがあると感じた。

二つ目は花業会会員である加藤直之君と再会したことである。彼は園芸学科昭和35年卒の同級生であり、卒業後間もなくメキシコに渡った。詳しいことは省くが、彼の地で造園業を営むと同時に、日本人メキシコ移住者のリーダーの一人として尽くしてきた。現在は日墨学院の理事長の要職にあり、日本とメキシコの親善に尽くしている。花業会の会員の中にはこの他にもあらゆる分野で活躍されている方が居られると思いに思う。

最後に、このツアーが実り多い成果が得られたのは、ひとえに現地ガイドを務めてくださった川原氏(Hitoshi

Kawahara)に負うところが大きい。日本人であるがメキシコに帰化し、メキシコの文化、歴史、政治にも詳しく、加えて植物、生物好きで、自らメキシコの奥地を探索しておられたので、まさにこの植物探索の旅に相応しい名ガイドであった。川原氏にお礼を申し上げたい。